



海外レポート

パキスタン回教共和国を訪れて

松 林 玄 悦*

日本は開発途上国に対し無償経済供与を行ってその国の向上に寄与している。外務省と関連する国際協力事業団 (Japan International Cooperation Agency; JICA) が、パキスタンに対する研究・教育機材無償供与のプロジェクトに関して事前調査団を派遣することになり、私はその調査団の一員として昭和61年10月14日から23日までこの国を訪れた。私の主たる任務は、カラチ大学化学研究所への日本からの化学機材供与計画に関して、その研究所の実情を調査することであった。

インドは観光でも多くの日本人が訪れ、割合知られた国である。しかし、その西隣りのパキスタンとなると一般にはあまり知られていない。私自身にも全く未知の国であった。この調査団の編成が急に決り、あわててパキスタンに関する最近の本を求めようと書店を何軒かまわった。やっと手に入れたのは簡単な旅行案内書であった。ともかく、今回の調査に加わって開発途上国の研究活動や教育の実情に触れることに大いに関心を持ち、また、私にとって回教国の訪問は初めてのことであり、すべてが期待に満ちたものであった。しかし、南アジアの国々の衛生状態の悪さを漠然と想像した。この国がマラリヤ汚染地区にあることや水を飲んでやられるひどい下痢のこと、さらに、狂犬病や破傷風の話聞いて不安を持ちながら出発した。

成田を12時に発ち、タイ・バンコクを経由してカラチには現地時刻で23時すぎに到着した。日本との時差は4時間である。10月中旬でもカラチは暑い。翌日には、日中40℃まで上った。ここは5、6月が一番暑く、10月は第二の夏の時期にあたり暑さがぶり返すそうである。

今回の調査団員5名のうち、私以外の人達は4日前にパキスタンに到着していた。彼らは西

部の州に新設される工科大学に対し日本から研究・教育機材が供与される計画に関して、この大学の建設状況等の現地調査を行っていた。カラチでこれらの人達と合流した後、カラチ大学化学研究所の研究活動の実情を視察した。さらに、調査団は研究所の教授と今回の供与プロジェクトの内容について詳細な協議を行った。この大学は15000人の学生を有し、カラチ市(人口は700万人という)郊外に広大なキャンパスを持っている。パキスタンには現在21の大学があり、その学生数は男子40000人、女子8000人というからカラチ大学はひときわ大きいわけである。この化学研究所では天然物化学の研究が盛んで、主に南アジア地域に産する天然物の抽出、精製、分析を行い、薬理活性のある化合物を探索している。教授、助教授7名、研究員(技官を含む)30名、そして約80名の学生から成る。今回日本からの援助により高分解能質量分析計をはじめとする測定機器や研究機材を一層充実させて研究の向上を計ろうとしている。また、パキスタンおよび南西アジア地域の分析センターとしての機能も高めようというものである。天然物化学の研究には欠かせない超伝導高磁場核磁気共鳴装置はすでに備えられていた。おおむねこの研究所の研究設備は立派なものであった。しばしば停電があつて、精密測定機器には悪条件であるが、発電機と大がかりな蓄電池を配備してその対策も十分であった。機器の保守にもそれぞれに技術員をあてて十分に機能していた。しかし、後になってイスラマバードで見学した大学の化学科の貧弱な設備から察するに、この研究所はパキスタンでも特別に整備されたところであろう。研究所では多くの女子学生を見かけた。彼女らが頭から肩へ布をかかけた姿で実験台の前に立っているのは何とも異

*松林玄悦 (GEN-ETSU, MATSUBAYASHI), 大阪大学, 工学部応用化学科, 助教授, 工学博士

様であった。

カラチでの調査の後、首都イスラマバード(人口20万)へ飛んだ。ここはもうアフガニスタンに近い。緯度からいうと大阪と同じくらい北になり、600米の高地にあるため10月下旬にかかる時期ではすがすがしい気候で、朝晩は寒いくらいだった。調査団はここでパキスタン教育省と無償供与計画の内容について協議した。最終的に双方で合意議事録を確認して、現地での調査団の仕事は終わった。

パキスタンは日本の二倍以上の面積を持ち、その人口は9500万人といわれる。この国の人口増加率は大変なもので10年で50%を示している。インダス川流域には肥沃な土地があり、綿花、米、砂糖きびを産する。しかし、インド国境にかけて広大な砂漠があり、北部や西部は山岳地帯で決して恵まれた土地ばかりではない。概して人々の生活は貧しいようで、納税者は100万人にすぎないと聞いて驚いた。文盲率は現在でも80%に達し、この状況は建国(1953年)以来ほとんど変わらないそうである。結核患者が多く、幼児の下痢による死亡も多いため、平均寿命はまだ40~50才ぐらいである。しかし一方では、綿花の輸出、繊維工業が盛んで、また、中近東地区への出かせぎによる送金が多く、この国の外貨準備高は年間数億ドルあるそうだ。カラチでは近代ビル群、すばらしい設備の病院、第一級の研究設備を持つ大学がある。そして市中には自転車の姿はまれであり、多数の車(90%以上が日本車)そしてバイク(これもほとんど日本製)が走りまわっている。市民はテレビ番組(1局のみ)だけでは飽き足らずビデオを楽しんでいるようで、貸ビデオの店がよく眼にとまった。カラチは活力あふれる都市に見えた。イスラムの国であるから、朝5時すぎ、まだ暗い街にスピーカーからコーランの声が響く。方々にモスク(礼拝堂)があって、一日5回の祈りがなされる。テレビでも祈りの時間には、ラホール寺院、コーランの章句、お祈りをする人々の姿を映していた。現在のパキスタンは回教国の中でも戒律の厳しい国であり、豚肉は見られないし、かけ事、アルコールは厳禁である。ただし、外国人はパスポートの提示により

ホテルの部屋で飲むことは可能である。この国の言葉はウルドゥ語である。しかし、昔の英国支配の影響で都市では英語が通じる。英字新聞もいくつも発行されている。テレビ番組はウルドゥ語でなされているが、英語によるニュースやドラマ番組も採り入れられている。

食事のときの水には注意しなければならない。熱いコーヒーや紅茶はまず安心だが、コーラやジュースに入れられる氷が曲物である。私はいつも氷なしのジュースをたのんだし、生野菜(水で洗ってあるから)も食べないようにした。そんな注意をはらっていてもしばらくしてひどい下痢になった。しかし、パキスタン製の下痢薬がよく効き、一日でぴたりと止ったのでほっとした。水を気にせず生活できる日本をどんなにありがたい国と思ったことであろう。

最後の日、わずかな時間がとれてイスラマバードのすぐ近くのタキシラを訪れた。ここはガンダーラ仏教文明遺跡の入口にあたる。昔アレキサンダー大王がこの地を通りインドへ進出した。1世紀頃のギリシヤ風の町シルカップの遺跡はのどかな別世界であった。北部の山岳地帯を通して中国から法頭や三蔵法師がはるばるこの地へやってきた時には、タキシラは仏教文化の盛んな緑なす学園都市であったといわれる。小高い山の中腹にある、2世紀頃に建てられたジョーリアン寺院跡から、灌木におおわれた緑豊かなタキシラの全眺を楽しんだ。小さな博物館があって、そこに収められた多くのガンダーラの仏像、生活用品、コインを飽かず見て、2000年も前の精巧な技術に感激した。

今回のパキスタン訪問では、カラチとイスラマバードの二都市、しかもそのごくわずかな部分を見たにすぎないが滞在中見た光景や聞いた話をもとにしてパキスタンの一部をここに紹介した。インドより独立して40年に満たぬ国である。回教国として一国をなしてはいるものの多くの民族を有し、多様な問題をかかえきわめてアンバランスな成長をしているように思われる。滞在中、よく街で見かけた三つの標語「FAITH, UNITY, DISCIPLINE」のもとに、これからの一層の発展を期待する。